

# 彼と彼女と俺

村木源次郎

背の高い男と低い丸々した若者が、旗竿を買ひに行つた。竹屋の店頭で小僧が飛出して来て挨拶すると、背の高い男は眼を白黒させ、口を歪め、低い若者は足拍子踏み鳴らして手を下し初めた。二人とも仲々言葉がない。それでも可成り長い間にどうにかして二本の竿を買ひ、だまり込んで店を出た。「随分酷い吃りだな」とお互ひに思ひながら。これが俺と彼れとの知り初めだ。その翌日、此の竿に翻したのが例の錦輝館の赤旗だ。

赤旗事件の時、神田錦町署の留置場では彼と寒村が一番猛烈に暴れた。幸か不幸か、同房に投入りこまれた俺は、最初はおつかなびつくりであつたが、彼の勇敢と熱情に勵されて俺もまた盛んに暴れ出した。これが彼れを模倣する第一歩だつた。未決監に廻されてからも彼に教へられて、歌ひ、喋り騒ぎとほした。お陰で「衆評執行猶豫」の筈が、懲役一ケ年言渡されて、彼と共に千葉監獄に送られた。

染井の奥に辻氏を訪ねた。WとOと俺は午前から喋り込んで正午過ぎになつた。Oが立ち上つて表へ出て「食パン」を一本買つて来て、みんなで漸く晝飯にした。その時、膝の抜けた着物に子供を斜に背負つて、恥しさうにお茶を出してくれた若い御内儀が彼女だつた。

菊富士ホテルの彼の部屋に或る日涙ぐんだ彼女を見た。さすがの彼女も、子の愛に引かされて、獨りで淋しい時には想ひ出して沈んでゐた。早く母親に生き別れた俺は、子供は成人の後きつと母親の行爲と氣持を充分了解するものだと思合つた。これは葉山事件のズツ前だ。そのまた餘程以前に久し振りで麴町の下宿屋に彼を訪ねた。俺は世間話の終

りに、彼の自由戀愛に賛成した。自分の事に關しただけに彼も妙な顔をして聞いてゐた。俺の歸つた後、未だ彼女が俺を知らないと思つてか、彼れから彼女に宛てて其の時の俺を紹介した手紙が、最近彼女の匡底から發見された。その中にこんな事も書いてあつた。

「しかし僕の此の状態も、渡邊の所にゐる一友人の來訪によつて全く打ち壊されて了つた。其の友人といふのは、横濱の同志で、赤旗事件の時に一緒に入獄して、其の後ち二度あつたきりで、随分暫く目だつたのだ。入獄する時には未だ二十才ばかりで、本當に文字通りの美少年であつたが、出獄後肺を病んで、此の頃はもう殆んど好いと云つてゐるのだが頗る赤味さしてゐる所などはどうして未だ本當ではない。」

これは餘談になるが、俺を生れた時からお爺さんであつた様に思つてゐる奴のために書き抜いておく。

マコやサチコの誕生時代は、彼のまだ貧乏ドン底時代だつた。しかも『文明批評』『勞働新聞』『勞働運動』等は此の間に出了。彼は當時よく北風會に出席して、運動方法を講じ論

義を戦わして、多くの闘士を養生した。實際運動の先頭に立つては、資本家、官憲、偽勞働運動屋輩を威伏せしめた。現在の勞働運動界の闘士猛將の多くは、彼の此の時の行動と精神が多量に打込まれてゐる。葉山事件以來彼の家の人となつた俺は、漸く運動より退いた。彼はいよいよ外に活躍した。彼と志を同じくして活動する勞働者は益々其の數を増した。

彼は彼の最も得意時代に於いて往々失敗した。其のよき例は、週刊『勞働運動』を發刊した時のボルとの握手だつた。彼もこの事に就いては、其後後悔してゐた。此の時の彼れの不鮮明な態度は、數名の堅實な同志を失つた。彼が此の時の大襟の廣大さは、反つて無恥狡猾なボル輩に乗ぜられた。俺は今尚ほ癪にさわつて週刊『勞働運動』は見ない。

彼と彼女は、金錢に就いては驚く程無頓着だつた。彼の墓口と彼女の手さげの中の金高は、俺が一番よく知つて居た。彼は計畫好きだつた。そしてドシドシと實行に移して行つた。彼女は或る意味のエゴイストだつた。同志たちと可なり烈しい議論もし、一緒に實際運動もした。かわりに多くの敵も作

つた。女の親しい友達ちは一人も無かつた。彼は非常な子煩悩だつた、殊にマコには全く目のないババだつた。マコは彼と俺が育てた様なものだ。彼女は家庭と子供に就いて無茶なやりばなしだつたから。

いつ、どこでだつたか、五六人の同志が落ち合つた時、いろいろの話の末に、俺の噂を初めた。中の一人が『彼奴は文章は書けず、演説はせず、宣傳は不得手、實際運動には参加せず、かてて病身。一體どうして主義者になつてゐるんだらう、氣が知れんと嘲笑した。そして皆んな同じ様な意味を語つた時に、『彼奴は彼奴で、相當な使ひみちがある、彼奴相當な仕事もある。黙つて見て居給へ。』と云つて、彼は獨りニコニコ笑つてゐたそうだ。俺は後で誰れからか其の話を聞いて、本當に嬉しかつた。彼はどんな人が訪ねて喋り込んでも心持ちよく一時間、二時間、随分長い時間を對手になつて嫌な顔を見せなかつた。俺は唯れにでも對手になつてゐる彼の努力に屢々感心させられた。殊に最近、一層彼の圓熟味が自然に發達して來た。彼を偏狹傲慢と云ふ一部の評は當らなう。

俺は彼の顔を見て居ると、あの少し曲つた鼻と、いやに出張つた顎の肉に不愉快な氣持ちがした。彼女にも同じ様な所があつたが、特に毛深い皮膚と、丸く張つた肩の肉付きは嫌だつた。彼も彼女もまた俺の凄い眼付きと痩せ細つた面構へ骨張つた顎と頬には随分不愉快な嫌な感じを受けてゐたものと見へて、可成り俺を敬遠してゐた。

殺される前日、即ち九月十五日の夕刻、俺は柏木で彼と逢つた。社の諸君がみんな檢束されてゐる話や何にかして別れたが、彼は『みんなが出て來たら大阪に本社を移して活動するも面白い。東京には俺一人頑張つてゐれば大丈夫だらう。こつちの通信は俺が送つてやる様にして。一つみんなが出て來たら相談して見たい』と例の計畫をまた企ててゐるらしくつた。夕立ちの烈しく降る中を彼女と俺は柏木の家を一緒に出た。神樂坂上で別れて俺は社に戻つた。そして其の翌日、彼と彼女は、永久に柏木へも社にも歸らぬことになつた。代りに俺の胸、俺の精神の中にいつもゐることになつた。

## 大杉君と野枝さん

近 藤 憲 二

大杉君は其著『獄中記』の中で云つてゐる。

『僕は元來極く弱い人間だ。若し強さうに見える事があればそれは僕の見え方から出る強がりからだ。自分の弱味を見せつけられる程自分の見え方を傷つけられる事はない。傷つけられたとなると黙つちやゐられない。實力があらうとあるまじいとかあるやうに他人にも自分にも見せたい。強がりたい。時とすると、此の見え方が僕自身の全部であるかのやうな氣もする。……』

しかし、よそ目には、強がらう強がらうと努めてゐる所は見えなかつた。生えぬきの強情、無銃砲、我儘としか見えなかつた。彼の『自叙傳』の隨所に見られる幼少年時代のひどい腕白が、ただ形を變へたに過ぎないと思はれなかつた。

大杉君は、軍人の家に生れ、軍人の周圍に育つて、彼れ自らも未來の陸軍元帥といふ抱負で陸軍の學校にはいつた程、軍人とは縁が深かつた。幼年學校をほり出されて外國語學校へはいつてからも、『大將となつて何とかする事が出來なければ、敵國に使して何とかすると云ふやうな支那の言葉に囚はれて、或は外交官になつて見ようかと云ふ多少の志』もあつた。大將が外交官に振りかへられても、其の精神にはやはり變りがない。語學校を出てからも、軍人としての野心を捨て兼ねてゐたと見えて、『其の舊師であり且つフランス語のオーソリテイであつた某陸軍教授を訪ねて、陸軍大學への就職を頼んだ事もあつた。其の話が餘程進行してゐる間に、しかも其の教授の運動の結果を聞きに行く筈の数日前に、電車事件で投獄された。そしてこの投獄と共に其後の運命はきまつて了つた。こんな風に長い間、軍人の精神に培はれ銀えて

來た彼だ。入獄の其日まで軍事的雄飛を捨て得ないでゐた彼だ。大杉君が一生を通じて謂ゆる武士道的な英雄的な氣質を持つてゐたのは少しも不思議でない。

大杉君には、敵の懷にさつと飛び込んで利劍の切尖を閃かして敵の急所を割ると云つた鋭さも早業もなかつた。鐵板の堅さで眞正面からどしんどしんとぶつかる質だつた。従つて彼れは、テロリズムにも勿論不賛成ぢやなかつたが、彼れ自らそれを實行する氣は乏しかつた。運動にも夜襲的な所は少く、大音聲に怒鳴つて出るやり方だつた。見得をきる方だつた。この性格は要するに、大杉といふ人間が、一般社會から大きくまた華々しく見られた所以であらうと思はれる。

□

大杉君の諸論文の中でも、最も僕の頭に深く印刻されてゐるのは、論集『正義を求める心』に收められてゐる「賭博本能論」と「正氣の狂人」との二論文だ。この論文は他の人が書いたんでは面白くもなければ力もない。ただ口先だけの氣焰豪語としか思はれない。が、大杉君が書いて本當に生きて

來る。彼れの見ずな意地つ張りな、しかも負け嫌いな亂暴さと、此の論文とを較べて、いかにも大杉君の書いたものであるからだ。

僕は、大杉君のこの賭博本能と正氣の狂人との中に、最も多く彼れの謀反人らしい所を見た。乗るかさるかだやつて見ると云ふ冒險心、庶二無二、無鐵砲にぶつかる彼の行動、それは實に彼の謀反人としての最も尊い所だつた。

「何に、駄目な事があるものか、やつて見ろ、背一ぱい押して見ろ、物事は半分どころまで見當がつけばそれで澤山だ。やつて見ろ！ ぶつかつて見ろ！」

これが大杉君のやり方だつた。哲學だつた。

確かに無鐵砲だ。が、彼れは其の無鐵砲で立派に押し通す經驗を積んでゐた。勿論、無鐵砲の失敗りも多くやつたが、彼れは決してそれを失敗りだとは思はなかつた。更に新しい冒險を、無鐵砲を、計畫してゐた。冒險から得た經驗を、そしてそれに伴ふ恐怖のまじつた逸樂を、得難い獲物として喜んでゐた。

大逆事件の後を受けて日本の社會主義運動は殆んど窒息の状態にあつた時に、『春三月くびり殘され花に舞ふ』と駄句つ

て酒々としてゐた彼れは、間もなく『近代思想』によつて氣勢を擧げ、更に『平民新聞』によつて火蓋をきつた。此の當時の寥々たる運動をして生氣あらしめたのは、まことに近代思想社同人諸君に負ふ所が少くなかつたのだ。

葉山事件以後、殆んど全く同志から孤立してゐた彼が、其の貧困のどん底にあつて『文明批評』『勞働新聞』を計劃發行したのも、やはり彼れの剛情と意地つ張り、抑える事の出來ぬ戰鬥精神の現はれであつた。

そして、殊に米騒動後の勞働運動勃興期に際しての活動はまことに特筆大書すべきものだ。

『お上の鼻いきか急に荒くなつて來た。が、戦後の勞働運動の勃興を豫期し且つ準備してゐた僕等には、其の鼻いきに遠慮する事は出来なかつた。そして遂に其の時期が來たのだ。

僕等は毎日、今日はやられるか明日はやられるかと、時としては手拭やハガキまで用意して駆けづりまはつた。……』

この時の活動が、それまで殆んど孤立の立場にあつた社會主義運動を勞働運動に結びつける上にどれほど効果があつたか知れない。當時の運動にどれだけ熱を與へ戰鬥精神を漲らしたか知れない。

大正九年上海に開かれた極東社會主義大會に参加した事、昨年ベルリンに開かれる筈であつた國際無政府主義者大會に加はらんとして遂にフランスへ行つた事なども、やはり彼の大膽から決行されたのだ。そしてこの二つの舉が我々の運動を國際的なものにする上に、どれ程大きな貢獻であつたか。

しかし大杉君は、ただ無暗な大膽、向見ず、無鐵砲、意地つ張りではなかつた。何かやり出す前にはいつでも非常な細密な計畫を立てた。やり出してからも常に最善の注意を拂ふことを忘れなかつた。其の大膽に於ける敏感、無遠慮に於けるはにかみと愛嬌、それ等の各々が相伴つてゐた所に、始めて大杉君の眞面目を見る事が出来る。

□

山川均君が『改造』十一月に書いてゐる。

「大杉君ほど遠目に見て居る者から恐がられ、近づいた人から親しまれた人はない。大杉君には、強い性格のどこかに、大きな魅力があつた。そして一度びこの力に觸れた人々は、時には大杉君に不平や不満を云ひつつも、結局は大杉君を離れまいとした。」



その通りだ。僕も其の一人だ。最初のうちは、あの妙に高慢ちきな一種の威壓を感じさせる態度が嫌だったが、親しむにつれて、いつの間にかあの人懐っこさしか見えなくなつてゐた。——あの眼玉、敵に對しては怒りに満ちたあの眼玉、仲間に對しては温味の湛れたあの眼玉、あの眼玉こそはまことに彼のシンボルであつた。

また大杉君には、高慢である云ふほかに、貴族的で贅澤だと云ふ批難があつた。なるほど彼れの生活気分には確かに小紳士の趣味があつた。五十錢入りの臺口の底をはたく時でも、牛飯を食はなく紅茶を飲む方だつた。従つて金のある時には——と云ふよりも寧ろ借金の出来る間は、僕等の仲間ではちよつと見られない食道樂煙草道樂をやつた。この事に就いて嘗て大杉君自らも、土岐哀果君に與へた『籐椅子の上にて』で、土岐君の『矛盾と悲哀』を——同時に彼れ自らの『矛盾と悲哀』を嘲つた事がある。

尤も土岐君の社會運動に對する考えと意氣と、大杉君の社會運動に對する考えと意氣とは、勿論大なる懸隔がある。しかもこれは十年ばかり前に書いたものだ。その頃の大杉君と最近の大杉君との間には、又更に大なる懸隔がある。しかし

大杉君自身、その思想と生活気分と相容れない所には、最近と雖も猶、不徹底さを感じてゐたやうだ。しかしそこにも亦大杉君らしい所がある。

大杉君がよく、『無爲』と云ふ字を原稿用紙一面に幾つも戯ら書きしてゐるのをよく見た事がある。常に『無爲』を痛感してゐたのだらう。だが『無爲』だと感じながら我々の事業のために永遠不滅の功積を残し、我々のために大なる光を掲げて呉れた大杉君に、僕等は深く感謝せざるを得ぬ。

□

大杉君はバクウニンが好きだつた。従つてバクウニンに就いて書いたものも二三ある。野枝さんとの共著『二人の革命家』の前篇、及び論集『自由の先驅』の附録『無政府主義の父』等は、何れもバクウニンの生涯と思想とに就いて書いたものだ。しかも大杉君がバクウニンに就いて書く時は、いつも非常な熱心と親みとを以つて書いた。と云ふのは要するに彼れ自身の中にバクウニンと共通する或る性格を見からではあるまいか。

總てにやりつ放しで、友達といふ友達には借金のしつ放し

迷惑の掛けつ放しであつたバクウニン。各國を飛び歩いて魂もからだも革命に打ち込んでゐたバクウニン。多くの缺點を持つてゐたが、其の一切の個人的缺點を消して了ふ力を持つてゐたバクウニン。どうも、やはり大杉君の好きさうな男ぢやないか。

ヘルツェンがボオランド一揆に際してのバクウニンに就いて書いた中に、次のやうな一節がある。

「……が、バクウニンはかうした有らゆる事實を考へ、有らゆる事情を慮ると云ふやうな事はなしに、妊娠二ヶ月を九ヶ月目だと思つてまだ遠い目的ばかりを見てゐた。彼は物事を自分がそれを望むやうにしか見ず、又其の重大な障害の事などは考へても見ずに、引き入れられてゐるのだ。彼れはワルソウが立つたと云ふ報道があれば、ヴォルガ河の沿岸にも、ドン河の沿岸にも、又ウクライナのどこにも、民衆がただ一人のやうに立ちあがるだらうと信じたかつたのだ。……」

大杉君にも稍やさう云ふ所があつた。大正十年の冬、上海に行つて廣東政府の活動やシベリアの形勢や××假政府にゐる人達の様子を詳に見聞して來た彼は、歸ると直ぐ週刊『労働運動』誌上に「日本の運命」、「××はいつ来るか」等を書

いて、同志に警告した。あの頃の大杉君には、今から考えると、やや『妊娠二ヶ月を九ヶ月だと思つてゐた』觀がないでもない。しかし斯う云ふ氣持でゐてこそ本當の運動が出来るんだ。尊い『妄想』だ。

また大杉君は、最近、無政府主義將軍と云ふちよつと皮肉なあだ名をとつたネストル・マフノの、謂はゆるマフノ運動に非常な興味を持つてゐた。フランスを追放されて歸つた時にも、滞在中は主としてこのマフノの運動に就いての材料を蒐めて來たと云つてゐた。そしてドイツにはいれなかつた爲めに、ドトツに亡命して來てゐる『マフノの右腕』ヴォリンに逢ふ事が出来なかつた事を、ひどく殘念がつてゐた。

そして大杉君は、フランスから歸ると直ぐ、このマフノ運動に就いて書いた。『日本脱出記』に收められてゐる『無政府主義將軍』が即ちそれだ。其の中に云つてゐる。

「……ロシア革命が産んだいゝんな出來事の中で、僕が一番心を動かされたのは、此のマフノキチナであつた。そして此の研究こそロシア革命が僕等に與へる事の出來る、一番大きな教訓を齎らすものぢやあるまいかと思つた。……僕にはま

だ、此の問題に對する確乎たる斷案はない。ただ多少の暗示があるだけだ。そして其の暗示は、僕が此の問題を少しでも知れば知るだけ、益々強くなつて行く。ロシア革命が僕等に與へる事の出来る一番大きな教訓を、豫期した通りに、此の問題の中に見出して行く。……」

僕は勿論、このマフノ運動に就いては、大杉君が紹介して呉れた以上のことは知らない。しかし、ただそれだけによつても、マフノ運動の精神と行動とは如何にも大杉君の興味をひく運動である。この『無政府主義將軍』なる一文こそは、大杉君の最も最近の思想を知る上に恰好の材料ではあるまいか。同時に我等に與えた教訓として。序に云つて置くが、大杉君はフランスから歸つて暫らくして生れた男の子にネストルと命名した。それほど彼れはマフノ運動に大なる興味を持つてゐたのだ。

□

僕が野枝さんを知つたのは所謂『葉山事件』の時からだ。従つて『青鞥』時代の野枝さんに就いては何も知らない。ただ僅かに『婦人解放の悲劇』によつて、其の當時の思想を

知るだけだ。

『青鞥』時代の野枝さんは『まだ本當につきつめた自分をば見出し得ないでゐ』たのだ。『あらゆる精神上のまた肉體上の苦痛を噛みしめて戦ふ所まで行き得ないでゐ』たのだ。『まだ殺の中でまごまごしてゐ』たのだ。『殺を噛み破つて飛び出さないではゐられないまでの凄しい眞實な要求をもつまでに成長してゐな』かつたのだ。エマ・ゴールドマンのものを讀んで、『何と云ふすばらしい、そして生甲斐のある彼女の生涯だらう！』と非常な感激に打たれながら、まだやはり『輕はづみに飛び出して犬死はしたくない』、『その前に先づ尊い自己の内部生命を生み出さなければならぬ』野枝さんだつた。

この野枝さんが、愈々本當に社會運動の中へ飛び込む決心をしたのは、大杉君との戀愛關係が出来かけた頃からだ。この頃の野枝さんの思想や心的變化に就いては、野枝さん自らが創作にかりて書いた『轉機』と『惑ひ』とに詳しい。

僕が野枝さんを知つたのは所謂『葉山事件』の時からだ。従つて『青鞥』時代の野枝さんに就いては何も知らない。ただ僅かに『婦人解放の悲劇』によつて、其の當時の思想を深める上に多大の効果があつたであらう。

□

『似た者夫婦』と云ふ諺があるが、大杉君と野枝さんとの一面には大ぶ似た所があつた。やりつばなし、意地つばり、見え坊、我儘、それ等の點で餘程よく似てゐた。しかし野枝さんのは大杉君に較べてもつと本能的で露骨だつた。大杉君は筆で、口で、さては腕力で喧嘩をしたとしても、其の次に逢ふ時には一向平氣な顔で酒々としてゐた。『勞働運動』誌上で賀川君を極端にやつつけて置いて、ひよつくり賀川君を神戸に訪ねたりした。山川君などにも随分手びどく突つ掛りながら、逢へば『ヤアどうだい』と云ふ調子だつた。しかし野枝さんにはそれはなかつた。最初から最後までぶりつぶりつしてゐた。貧乏に就いてもさうだ。大杉君は貧乏の中にあつて傲然としてゐた。野枝さんは捨て鉢の態度を見せた。議論をする時にも、ただ議論をするだけではなく無暗に突つ掛つた。従つて野枝さんには友達は少なかつた。殊に最近の野

枝さんには女の本當の友達是一人もなかつたと云つてもいい位だつた。

かう書いて來ると何だか野枝さんの缺點ばかりを拾ふやうだが、然し僕の見た野枝さんの一面は確かにさうだつた。そして野枝さんの長所も個性も、やはりこんな所から生れ出されてゐるのではあるまいか。嫌やな者を頭から毛嫌ひした野枝さんは、それと反對の者には心からの親しみを見せた。人一倍の人懐っこさを見せた。その點に於ても野枝さんは本能的だつた。

我等の運動の敵に對する野枝さんの態度は、飽くまで全身的で、そこには微塵の妥協もなかつた。勝氣で、ながい間だ無知と卑屈とを強いられて來た現代の女には珍らしい決斷力に富んでゐた。大杉君の入獄中やフランス行きの留守中にも勞運社に野枝さんの居た事は、慥かに僕等に氣強かつた。

しかし我々の有力な同志であつたこの二人は、遂に敵の毒手にかかつて倒れた。僕等はこの二人を懷ふ時更には、また少年宗一君を殺した奴等の飽くなき行爲を思ふ時……然し、いい教訓であつた。興奮劑であつた。